

図書館が行う地域おこし協力隊支援について

岡田有利子(元・伊予市立図書館)
(えひめライブラリアンシップネットワーク)

1、はじめに

2009年度から総務省によって制度化された「地域おこし協力隊(以下、協力隊)」という制度がある。2018年度、愛媛県では106名の現役協力隊員が在籍しており⁽¹⁾、伊予市においては2018年度末、2名が3年間の活動任期を終えた。モノではなくヒトに着目したこの制度は、華やかな活躍事例報告の一方で、うまくいかない事例も耳にする。地域を活性化させる役割を持つ協力隊を、公共図書館が支援できないか考察した。

2、地域おこし協力隊とは

都市部から居住を移し、3年の最長任期の中で地域協力活動を行う。新しい視点を取り入れることで、地域の活性化につながる⁽²⁾。各自治体それぞれに独自の課題があり、実際に求められる活動は多岐にわたるが、地域ブランドや地場製品の開発・販売・PR等、ビジネスと深く結びついているものが多い。地域おこし協力隊ビジネスアワード事業⁽⁴⁾も開催されている。そして、任期終了後も、その地域への定住・定着を図る取組である。2009年度、隊員数89名、自治体数31から、2019年度隊員数5,359名、自治体数1,061と著しく拡大している⁽³⁾。2017年度末の調査では、協力隊任期満了後、隊員の6割が定住、3割が起業している⁽²⁾。

3、地域おこし協力隊の課題

協力隊の制度は、比較的新しいものであり、広く周知されているとは言い難い。受け入れる側の地方自治体行政、地域住民においても「手さぐり状態」である地域も多い。都会から田舎にやってきた何をする人なのかよくわからない人、という認識も多い。人と人がわかりあうには、何をしたい人なのか、どのような人なのか、“わからない”ことが一番の障壁になる。そのため、現在行われている行政の広報やHPのみの発信では限界があると考え。また、現在の伊予市の協力隊員は、自己紹介シートを持ち担当地区内を戸別訪問しているため、担当地域内では時間をかけて知られているが、担当地域外には知られていない。しかし、地域の活性化は伊予市全体に繋がることである。伊予市の公共図書館が、協力隊の制度を紹介し、地域と協力隊をつなぐことができないかと考えた。

4、図書館が行うメリット

① 資料の集約基地として

協力隊の制度を周知するだけではない。赴任してきた協力隊が、まず最初に行わなけ

ればいけないことは、地域を知る、人を知る、そして自分を知ってもらうことである。地域の人たちが、その地域で何を大事にしてきたのか。外から来たものが理解し、共に深め、協力隊と住民が同じ方向を見るには多くの時間を必要とする。そこで、郷土資料や行政発行物を持ち、民間会社のリーフレット、地域の人が開催するイベントやワークショップの案内などが集まる図書館がその役目を担う。ネットに上がらない地域の情報を持ち、また、学芸員、史談会、地域のキーパーソンなど、人とのつながりを持つのも公共図書館である。

② 協力隊の発信・受信の交流拠点として

図書館は土日も開館しており幅広い層の来館者が見込まれる。協力隊の活動内容を掲示したり、協力隊を交えたイベントを行い、協力隊が現在何を行っているか、何を目標しているか、発信していく場所にもなる。また、場があつてこそ、人がつながる。担当地域事務所等にデスクは持っているが、常に地域に出ている協力隊と、住民が図書館に行けば連絡や情報を得ることのできる交流拠点にする。

③ 図書館のビジネス支援の周知として

協力隊の活動は、地域ブランドや地場製品の開発・販売・PRなど、ビジネスと切り離すことはできない。そして、協力隊としての任務終了後も、地域に定住し、地域づくりの実践活動に携わっていく、地域をリードする人材であることが多い。移住と起業は切り離すことができない。彼らをロールモデルとして図書館がビジネス支援をすることで、他の移住者や起業希望の市民にも、図書館のビジネス支援を浸透させることができる。図書館側としても、地域外から(図書館機能も充実している都市部)の協力隊の目線を取り入れることで、郷土・行政資料の充実をはかるメリットがある。

また、協力隊の生き方は、今後の日本人の生き方のモデルになる。自分や家族は何に価値をおき暮らしていくのか、何を大事にして生活していくのか、出身地を越えて活動していく彼らは、東日本大震災後、人々が求めている人間らしい暮らしの最先端でもある。その協力隊のビジネス支援を行うことは、これからの日本で主流となる生き方・働き方の支援を行うことになる。

5、具体的な提案

前述の1～4を踏まえて以下に具体的な提案を示す。なお、この予算については、用紙代などの需用費を、図書館だけではなく、協力隊が所属している市役所内部署にも負担してもらうことにより、低く抑えることができるメリットがある。

①郷土の魅力・理解を深めるワークショップの開催

地域おこし協力隊の就任直後に、担当地域の歴史を深めるワークショップを開催する。司書が赴き、普段は禁帯資料である郷土資料、複写機なども持参する。協力隊、地域の人々、その他郷土に詳しいキーパーソンに参加してもらい、郷土の魅力を再発見する。当たり前すぎて実感してこ

なかった魅力などを、地域外からきた協力隊の視点で掘り起こすことができる。伊予市誌を全て読んだという協力隊員がいたが、現在の市史は合併の際に中心となった市主導で作られているため、従たる町村の文化は取り上げられない傾向にもある。そこを、過去の資料を持つ図書館がフォローする。成果物として一枚の紙(壁新聞やマップ)にまとめ、図書館や担当地域事務所などに掲示する。データ化も同時に行い、伊予市の HP、伊予市立図書館の facebook ページ、ツイッター等、その特色に応じたデジタル媒体でも、進行状況や全体像などを発信する。

②協力隊の活動に対するレファレンス支援

多岐にわたる協力隊の活動内容のうち、地域ブランドや地場製品の開発・販売・PR等以外でも、地域の歴史文化は彼らの活動の重要なキーポイントになる。図書館が持つ地域資料やビジネスレファレンス資料を用いて、協力隊の活動を支援する。

③図書館内での協力隊の活動の展示

図書館内に協力隊の常設コーナーを設ける。一カ月ごとに張り替えを行い、今の協力隊が何をしているのか、何を狙っているのか、来館者に示す。これは協力隊担当地域のアピールにもなり、図書館利用者が市内の他の地域を知ることにもなる。また、図書館が協力隊の活動に対して現在行っているレファレンスの過程も提示する。図書館ではどんなビジネス支援ができるのか、具体的な人(協力隊員)を設定して途中経過を公開することで、具体的に市民に知ってもらう。

同時に、市民との交流を目的として協力隊目安箱を設置し、協力隊に聞きたいこと、伝えたいことなどの意見も募り、市民と協力隊との相互理解を深めるための双方向ステーションを作る。

④利用者によるレポーターの育成。

伊予市の HP、伊予市立図書館の facebook 専用ページ、ツイッター等から、①③の情報発信をデジタル媒体でも同時に行い市内はもとより県内外への拡散を実施するが、行政からの一方的な発信ではなく、利用者の中からレポーターを募り、取材の上で投稿を重ねてもらう。市民に協力隊への関心を促すとともに、図書館職員ではなく、利用者からの視点で投稿してもらうことで、図書館業界では当たり前だが一般には知られていない事柄の気づきを得たり、図書館の広報や企画の未熟な点を知ることができる。図書館内で取材・投稿するためのレファレンス・文章作成・パソコン活用などの講座・ワークショップや、レポーター同士の交流会も開催する。職員が講座を全て担うのではなく、デジタル媒体の拡散力にたけた協力隊員が講師となってもよいし、地域の中から得意な人に講師を務めてもらい、市民の活動発表の場に活用することもできる。図書館(公共機関)のみが行う一方的な上からのアーカイブではなく、多くの視点から捉えた記録を作成することで深みのある歴史が作成され、残っていくとともに、アーカイブの重要性・面白さを市民に体感してもらう。

⑤協力隊の活動報告ペーパーの作成

①のワークショップ成果、③のコーナー展示、④のデジタル発信素材を活用して、協力隊の活動内容を中心としたペーパーを発行する。図書館に来ない人への情報発信として作成し、市役所や保健センターなどの市内の主要施設や各学校等への配布、回覧を行う。協力隊の活動と図書館のビジネス支援のアーカイブを目的として、年度末には簡易な冊子を作成する。④と同様に図書館とリポーターが協力して発行し、ネットと来館者のみでは補えない層のカバーを目的とする。また、東京・大阪など都市部で行われる移住促進フェア・愛媛フェアなどでも配布する。地域の文化を担う公共図書館の協力隊支援は、移住促進のプロモーションとして十分に使用することができる。デジタル媒体と共に、冊子というアナログ媒体で伝達することにより、異なる経路で拡散することができる。

⑥図書館内に伊予市における移住・起業などのコーナー設置

移住・起業などの資料をコーナー設置するほか、伊予市内の移住・起業情報を提示する。現在、協力隊OBが設立した「いよりん」という伊予市移住サポートセンターがあるが、現在シェアオフィスの状態で、ネット連絡や個人連絡の形が多い。図書館内にも、「いよりん」に届く声の窓口を設置し、「いよりん」の持つ情報(空き家情報など)も提示する。

⑦図書館内に愛媛県内の地域おこし・移住に関する冊子コーナーの設置

愛媛県の地域おこし協力隊は、愛媛県に所属する移住コンシェルジュを中心に現在強い繋がりを持っている。担当自治体は異なっても、同じ県内の協力隊員として、経験者から話を聞いたりアドバイスをもらったりする機会が多く、県内ネットワークの強固な繋がりとは他県に比べて珍しい。また、協力隊が取材・編集・発行している冊子(今治市の「ひもとく」)や、自治体が発行している移住に関する冊子(内子町の「内子町の新しい風」)など、地域おこしや移住促進のために発行されている紙媒体も多い。そのような冊子を伊予市に限らず収集し展示する。より多くの事例を知ること、また他の自治体の協力隊とさらに繋がることで、伊予市の協力隊に生まれる新しい力にも期待し、図書館利用者に対しては県内の協力隊、ひいては協力隊制度そのものを紹介することにもなる。

それらの冊子に掲載されている協力隊や協力隊OB・OGの活動事例は、具体的で斬新な起業の詳細も多く掲載されているため、ビジネス支援資料としても活用できる。

6、課題

協力隊の活動は、山間部、漁村地域、商業エリア(商店街エリア)など、同じ伊予市内でも担当地域によって異なる。そして、隊員によって得意分野も異なる。図書館が協力隊の活動をサポートするのはいいが、逆に図書館が協力隊の活動に柵を作ってもいけない。図書館が得意とする資料面やアーカイブ事業でのサポートと地域内のネットワークを繋ぐことに重きを置く。

7、終わりに

伊予市立図書館に勤務していた頃、任期中の伊予市の2人の協力隊員が足しげく図書館に通ってきた。学校での読み聞かせの選書や、地域事務所内図書室の運営の相談など、いろいろな話を聞いていたが、個人的な彼らの生き方や思いも知ることができた。

協力隊は三方よしの制度とも言われている⁽²⁾。地域にとって、新たな視点が入ること、協力隊員の熱意と行動力が地域に大きな仕事を与えること。地方公共団体にとって、行政ではできなかった柔軟な地域おこし策をとること、住民が増えることによる地域の活性化。そして、地域おこし協力隊にとっては、自身の才能・能力を活かした活動をする、理想とする暮らしや生き甲斐を発見することである。

本稿を作成するにあたり、9人の愛媛県の現役協力隊員と協力隊員 OB・OG、1人の協力隊希望者に話を聞いた。都会に出た後地元に戻るきっかけを探していた人、大震災後に生き方を再考して愛媛県に来た人、1人1人に人生がある。愛媛県に来て熱心な活動を行う彼らの人生も、図書館が支援することで輝いてほしいと思った。そして、ヒトの制度である協力隊を迎える地域住民・地方自治体行政の職員もヒトである。ヒトの問題は難しいことが多い。しかし、ヒトを変えることはできないが、ヒトが繋がる仕組みを変えることはできる。図書館が間に入ることで、地域、協力隊、図書館も含めた地域自治体行政の全てが活性化される仕組みを支援したいと思った。

協力隊を支援することで、彼らの担当地域が活性化され、担当地域とその他の地域(合併前の旧市町村)を繋ぐことで相乗効果も期待され、結果伊予市全体が輝いていくことを期待している。ひいては伊予市を越えて、希望あふれる市町村が1つでも多く、図書館の力で充足・発展していくことを願っている。

《注》

⁽¹⁾総務省『地域おこし協力隊の活躍先(受入れ自治体一覧)(平成30年度)』

http://www.soumu.go.jp/main_content/000608068.pdf

⁽²⁾総務省『地域おこし協力隊について』

http://www.soumu.go.jp/main_content/000520754.pdf

⁽³⁾総務省 地域の創造・地方の再生 地域おこし協力隊

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html

⁽⁴⁾地域おこし協力隊ビジネスアワード事業

http://www.soumu.go.jp/main_content/000430045.pdf

⁽⁵⁾正岡利朗 地域おこし協力隊の現状と課題 高松大学・高松短期大学 研究紀要第69号

http://www.takamatsu-u.ac.jp/library/06_gakunaisyupan/kiyo/no69/69_UG002_001-011_mas_aoka.pdf

《参考文献》

椎川忍、小田切徳美、平井太郎、一般財団法人地域活性化センター、一般社団法人移住・交流推進機構『地域おこし協力隊 日本を元気にする 60 人の挑戦』学芸出版社 2015 年 9 月

《参考サイト》

総務省 地域おこし協力隊推進要綱

http://www.soumu.go.jp/main_content/000563626.pdf

JOIN ホームページ「ニッポン移住・交流ナビ」地域おこし協力隊まるわかりQ&A

https://www.iju-join.jp/feature_cont/file/015/